

俳句通信

特別作品25句 藤本美和子「寒林」
星野高士「来ては去り」

特集〈コロナ禍の俳句について〉

「時代を負いて時事を説かず」	今井 聖
「当事私的顔末記」	岩城久治
「俳句の光を呼ぶ」	角谷昌子
「コロナ禍の俳句は詠むべきか」	鈴木太郎
「外国語という名のウィルス」	須原和男
「追放されながらも」	高橋修宏
「家書万金」	高柳克弘
「ある春の一日」	谷口智行
「コロナ俳句を詠もう」	戸恒東人
「令和二年の自作について」	波戸岡 旭
「コロナと人類」	坊城俊樹
「コロナ禍の俳句について」	広波敬雄
「詠みたいときに詠めばいい」	渡辺誠一郎



追悼・有馬朗人

有馬朗人50句
星野恒彦 岸本尚毅 津久井紀代

【円熟作家12句】

鈴木節子「はがね一本」
山元志津香「寒苦鳥」
小山徳夫「春早し」

●作品● 高崎公久・尾池和夫・向田貴子・仲村青彦・
行方克巳・能村研三・水田光雄・後藤昌治・
前澤宏光・杉浦恵子・今村潤子・宮崎夕美・
村上喜代子・細見道子・米田規子・河原地英武・
原 朝子ほか

寒林

藤本美和子

花 枇 杷 の 奥 に 籠 り て 人 遠 し
完 熟 の キ ウ イ フ ル ー ツ 風 邪 心 地
さ し あ た り 花 柵 の 辺 り ま で
一 陽 来 復 闕 伽 桶 に 竹 柄 杓
あ を ぞ ら の 月 と ブ ロ ッ コ リ ー 畑
自 転 車 の 籠 に 突 つ 立 て 土 大 根

季節の中で 100

東京都・代々木公園



水
辺
ま
で
あ
と
ど
の
く
ら
い
霜
柱



有住 洋子

散歩のための散歩が増えた。今日は南の方へ、明日は東に向けて歩こうかと思う。代々木公園は、家から向かうと西門から入る。冬木立の根元には、長々と影が伸びている。その蔭を踏みながらしばらく行くと、広々とした野原が現れる。ぐるりと森に囲まれていて、遠くの高層ビルが層気楼に見える。野原の先は身をよじる古木の林立。冬芽が固いが、日溜まりに薄紅色の蕾をいくつか見つけた。木はどれも桜だ。満開の桜の姿がまぼろしのように浮かんだ。

凍
蝶
の
小
さ
な
貌
を
失
は
ず

草の上に一頭の蝶が微動だにしない。もう命はないのかと思いつつ眺めていた。まだ動かない。やはり死んでいるのだろうか。そしてまだ眺めていた。もしかしてという思いが出てきた。地べたに顔をこすりつけ、顔を覗いてみた。しっかりと生きている目があった。

依田 善朗



特集 〈コロナ禍の俳句について〉

コロナ禍についての俳句がかなり詠まれています。

その状況について思うこと、またコロナ禍をどう詠んだか、

あるいは何故詠まないか、などについて

13人の俳人にお書きいただきました。

追悼 有馬朗人



世界的に有名な物理学者であり、元東大総長、元文部大臣、そして俳誌「天為」の主宰である有馬朗人氏が2020年12月6日に亡くなりました。90歳。氏は1930年9月13日に生まれ、1945年より作句、東大に入学した1950年に「夏草」に入会、山口青邨に師事。1990年には「天為」を創刊主宰。

1987年、句集『天為』で俳人協会賞、2004年『不稀』で加藤郁乎賞、2012年『流轉』で詩歌文学館賞、2018年『黙示』で蛇笏賞を受賞しています。その人柄・句業について3人の方にお書きいただきました。そして代表句50選は津久井紀代氏にお願いしました。